令和2年度　外国語科研究のまとめ

下伊那教育会　外国語委員会

Ⅰ 研究テーマ

主体的にコミュニケーションを図ろうとする子どもを育成する指導はどうあったらよいか
～学び続けるための授業づくりと評価のあり方～

Ⅱ 研究テーマによせて

昨年度の研究を引き継ぎ、さらに深めようと考えていた矢先、直接対話を通して学び、身につける授業に待ったがかかった。しかし臨時休業明け、何とか教室での授業を充実させていきたいと少しずつ工夫し手探りで進めていくうちに、今まで当たり前に行っていた「周囲と関わりやりとりをすること」「自分の意見を発信したり相手の意見を取り入れたりして考えること」で学びが深まり子どもたちが主体的に学習に取り組むということをあらためて実感することができた。また、直接活動ができなかった時期に必要に迫られはじめたリモート授業でも、リモートならではのよさや発展的な取り組みも実践し成果を得ることができた。そこで本委員会では、以下のような３点に重点を絞り、今年度の研究をまとめることにした。

重点１：個が育つための授業づくりに向けて

各学校で行い始めている「Small Talk」に焦点を当て、積み重ねることの重要性や日々の授業への影響について明らかになったことをまとめた。また、友との関わりがどのように子どもの思考の深まりや広がりにつながっているかについて、公開授業の生徒の様子から明らかにした。

重点２：コロナ禍における対話活動の工夫

リモート授業を通して明らかになったこと、実践例をまとめた。

重点３：小学校外国語の評価

小学校外国語が本格実施となった。各学校での評価方法や、通知表での伝達方法について明らかになったことをまとめた。

Ⅲ 研究の内容

１．公開授業を通してわかったこと

（1）授業の実際

授　業　者：　岡田　直也　教諭（松川町立松川中学校）

授業 学級：　１年１組　（男子　１７名　女子　１７名　計　３４名）

単　　元：　NEW CROWN 1　Lesson3 ～ Lesson6 を通じての特別単元

本時　主眼：　Small Talk で会話を続けたり発展させたりする方法を学習してきた生徒が、先生に英語でインタビューする場面で、他グループの質問や表現の共有をし、グループでアイデアを出し合うことを通して、新たな質問や表現を使った会話をすることができる。

本　時　案：

時間	学習内容	予想される生徒の反応	教師の支援・指導・評価
5	○あいさつ ○ウォームアップ ○今日の流れ確認	・曜日、日付、時間、天気などを互いに聞き合う	・あいさつから元気に明るく ・学習形態はグループ（松中スタンダード） ・黒板上には動詞のカードを掲示
	Today's Goal：松中の先生のことを英語を使ってもっと知ろう！		

30	5 6 15 4	○<u>作戦の確認</u> 事前にたてた質問や会話の流れをグループで確認 ○<u>会話Ⅰ</u> 会話する先生の場所へ移動し、始める ○<u>作戦会議（グループ→全体）</u> 会話の振り返りを行い、再び先生との会話に向けて話題を考える ○<u>会話Ⅱ</u> 会話する先生の場所へ移動し、始める	・誰がどの順番でしゃべるのか確認してみよう ・初めての会話で緊張するな、通じるのかな ・１分間で聞きたかったことが十分聞けた ・問い返しが難しくて途中で詰まってしまった ・言いたいことが言えずに止まってしまった ・次はどんなことを聞いていこうか ・色々な動詞を使ってみよう ・他のグループではどんな話題で会話をしたんだろう	・グループごとに話し合いが進められているか机間指導 ・全体のタイムキーパーを行う ・作戦会議ではどのくらいのことが知ることができたか聞き、よりその先生のことを知るためにどんなことが聞けそうか考えさせる 自分たちが考えた質問を使い、先生と英語で質問したり、応答したりすることができたか
15		○<u>まとめ</u> ○あいさつ		

授業を見る観点

①会話Ⅰ後の作戦会議を行って、会話を振り返ったり、意見の共有（協働学習、仲間との学び）を行ったりしたことは、会話Ⅱでさらに詳しく先生たちのことを知るための会話につながっていたか。

②生徒たちが本時の達成感を得たり、今後につながる意欲や表現力の高まりを感じたりすることができたか。

（2）１回目の Small Talk 後の作戦タイムで情報を共有していた生徒たち（A 生～D 生、E 先生）

A：食べ物　美味しんぼ　なんでも（好き）って言ってたじゃん

（それぞれのデータを持ち寄って話し合いがはじまる）

B：ドラゴン桜って言ってた？

C：そう、ドラゴン桜。説明してもらおうか。

B：はあ。

C：何の本読んだかって聞いた？

A：漫画って・・・。漫画以外ってなんていうの？

ALT：except, or anything else・・・

D：ねえねえ・・・マンガって聞いた。

A：漫画以外で好きなものって（聞きたい）

ALT：Ah, What kind of book・・・　変えてもいいんだよね？

C：After school 聞いてみようか？

D:：①<u>After school って何？（みんなで教える）</u>

C：何を聞くんだっけ？

A：家族構成や・・・Who is

C：どういう話だっけ？

（JTE が来て）

JTE：気になったテーマありました？

C：（質問を）変えたっていいの？

JTE：いいですよ。・・・ここ，アニメ率高いんだ。

B：アニメの質問・・・

C：声優って・・・。

A：キャラクターボイス！？

C：あ、キャラクターボイス！（書く）もしかしたらさ、タレントじゃなくて、キャラクターボイスに変えるかもしれないよ。

A：でも声優にははまってなさそう。

C：I don't know っていうかも。

D：お笑いは？

B：②C さんがタレントって聞いて、E 先生がお笑い芸人って答えたらどうする？

C：キャラクターボイスって聞くわ。・・・やっぱりタレントにする！

【考察】

１対１で行う Small Talk をグループで行った。中間の振り返りもグループで行うことで、一人では聞き取れなかった事柄を、全員で話し合い、思い出し合いながら共有していくことができていた。また、質問する内容や質問の仕方についても、お互いの力やアイデアを出し合いながら、グループとしてまとめることができていた。英語が苦手だという D 生も、グループの中では生き生きと活動し、友だちに対して気軽に質問ができた（①）。授業後の振り返りでも、E 先生の反応や答えた内容を十分振り返ることができていた。質問した E 先生に対する理解が深まったという点では、本時で十分達成感も得られていたといえる。しかし、言葉尻をとらえて笑いあったり、話題が質問項目とは離れ、質問の内容を深めていこうとする意欲にやや欠ける部分があった（②）。どのように内容を深め、質問の仕方を工夫させるかについては、その方法（質問パターンや定型句を提示するなど）がもっと具体的であった方がよかったと思われる。

（3）作戦会議での友との関わりで考えを広めたり深めたりした F 生

授業の流れ	S	T
会話 I	F 生：Hi. What country do you like? F 生：Oh, I like Japan.　It's safe.　Thank you. G 生：（F 生につぶやく） F 生：（うなずく）	K 先生：（答える）
会話 I の後のグループ作戦会議	G 生：さっき、なんだっけ。(F 生の学習カードを見ながら) ①What country do you want to go? を聞いてないじゃん。 H 生：これ、聞けばよかったのに。しっかり覚えておいて。 G 生：③順番変える？ H 生：①F 生は少し時間かかりそうだから、最初に言おう。 G 生：そうしたら、俺が時間短くするよ。 H 生：他で短くしよう。2 分くらい使っていいよ。 I 生・J 生：じゃあ順番変える。 	

会話Ⅱ	F 生：（1 番に話す）What country do you like? F 生：（うなずく）　Do you like モンゴル? F 生：I like Japan. It's safe. F 生：②<u>What country do you want to go?</u> H 生：<u>（何度もうなずく）</u> F 生：I want to go the UK. F 生：UK. Thank you.	K 先生：I like many country.　I went to モンゴル　とか　ミクロネシア K 先生：Um…many fish! K 先生：Me too. K 先生：I want to go to Egypt and Kenya. K 先生：Uh…UK.

【考察】

G 生を中心として、グループ全体で F 生の活動が円滑にできるように、限られた時間のなかでの話す順や時間配分を検討する場面が見られた（①）。この事例は、Small Talk の活動の形態を個人とせず、グループにしたことが効果的であった場面を示す例となる。友の助言があり、前半は途中で終わりにしてしまったことを、後半に自分の力で伝えることができた（②）。また、時間制限があったことで Lesson Goal を達成するために、優先事項から聞き出そうとする姿が見られた（③）。

（4）相づちや受け答え等決まり文句の習得が主体的な対話活動につながった例

①小学校からの積み重ねで、習得してきたことが対話の中に自然にあらわれた L 生

授業の展開	S	T
会話Ⅰ	L 生：What sport do you like? L 生：Oh, nice. L 生：①<u>Do you watch tennis?</u> L 生：Uh…（うなずきながら） L 生：I like volleyball. L：①<u>What sport do you watch?</u> （L 生、首をかしげる） L 生：①<u>What (*Which?) sport player do you like?</u> L 生：I don't know…（中略） L 生：②<u>ハイキュー。（笑いながら）</u>	M 先生：I like dodgeball, volleyball and tennis. M 先生：Thank you. M 先生：<u>Watch tennis?</u>　Ah…I watch tennis…えーと何て言えばいいんだ？In high school. High school 時代は I look(*watched) TV tennis (*tennis on TV). M 先生：What sport do you like? M 先生：Me, too! M 先生：<u>Uh… I watch volleyball.</u>　Because…わかる？ I (have) teach (*taught) volleyball (*for) 11 years…and…バレーボール観るくせがある。 M 先生：<u>あー、古賀紗理那。</u> M 先生：②<u>Why do you like volleyball?</u>
会話Ⅱ	L 生：What sport don't you like? L 生：③<u>I don't like basketball.</u> L 生：②<u>Uh... (the) ball is hard.　（笑いながら）</u>	M 先生：えっ don't?　うーん…nothing. M 先生：②<u>Basketball?　Why?</u>

【考察】

リアクションも自然にできるＬ生。Ｍ先生がバレーボールを観ることに関連した質問を投げかけたり反応したり、問い返しに対しても適切に返答でき（②）、Wh-の質問を上手に利用して自分の好きなスポーツから話題を膨らますことができていた様子がみられた（①）。

会話Ⅱでは、「苦手なスポーツはあるか」と聞きたいとワークシートに記入していたＬ生。Ｍ先生が「ない」と返答したことに対し、すかさず自分の意見も言うことができていた（③）。このことから、「既習表現を用いて対話を続けていく」という Small Talk の典型的なスタイルが定着していると感じた。普段の授業で積極的に Small Talk を実施し、生徒たちが対話することに慣れているだけでなく、「さまざまな表現を使いたい」という意識が強い子が多くいることも１つの理由であると考えられる。

②相づちや問い返しで、自然な対話活動ができたＮ生とＰ生

場面	S	T
Ｎ生とＯ先生の対話	What do you do on your holiday? （笑）①You play soccer and baseball.　えっと… ④Where do you play soccer? ④Where do you play soccer? At home. え～、④Where do you play baseball? ④Where do you play baseball? ②Oh.　④Is it fun? Thank you.	I play soccer and baseball. One more. あ、at home! One more. I live in Komagane.　Near Junior High School. Junior High School ground. I don't know…
Ｐ生とＯ先生の対話	What food do you like? ②Oh, ramen. ④Why? （笑）え一、④Where do you eat ramen? （笑）Oh, oh, oh …　ん一 ③Anything else? ③Anything else? 他に好きなものは。 ②Oh, nice. え一、④Where do you eat *cha-han*? Oh, thank you.	I like ramen. I like ramen because … おいしい！ I eat ramen at お店？ One more. Anything … どういうこと？ Food で言うと I like *cha-han*. I eat *cha-han* at お店？ Thank you. ごめんね。

【考察】

Ｎ生は、What, Where などの疑問詞を使い、スポーツ名を入れ替えて質問を続けることができた。また、Ｐ生も食べ物の名前を入れ換えてどこで食べるのかを尋ねていた。上記のやりとりから、生徒たちはこれまでに Small Talk を積み重ねる中で相手の言葉を繰り返して確認（①）したり、相づちを使って応答（②）したりと会話を続けるために必要な技能を身に着けてきている。また、“Anything else?” などの問い返し（③）を使って話題を広げ、更に Why, Where, When などの既習表現を用いて相手の応答に関連した質問（④）をする力もついてきている。Ｎ生は、野球について“Is it fun?”と相手の気持ちを尋ねる質問もできていた。

2. Small Talk の位置づけについて

既習表現を繰り返し使用してその定着を図ること、対話の続け方を身につけることを目的に、小学校では Small Talk を行っている。中学校でも、新学習指導要領の導入に向けて、既習表現を想起させるのはもちろんのこと、新出表現なども用いた実践が始まっている。本委員会の昨年度の研究から、Small Talk を続けることで、即興的なやりとりが期待できることがわかってきた。また、小中のつながりを意識した共通の Topic（テーマ）の設定や効果的な指導方法について考えていく必要があると考えた。

（1） Small Talk のねらい

ア 既習表現を繰り返し使用し定着を図ること

イ 対話を続けられるようにすること

（2） Small Talk の流れ

ア Teacher's Talk

教師（と ALT）が、児童・生徒に使ってほしい表現も交えながら、Topic に関して教師自身についての話をする。実物やジェスチャーなどを加え、子どもの反応を確かめながら、途中質問を投げかけたりして、話題に巻き込めるようにする。

イ Teacher → Student

Topic について児童・生徒数人にも問いかける。児童・生徒の応答に、質問やコメントを重ね、話題を膨らませる。また、日本語での応答であれば、英語で、単語での応答であれば、文章にして言えるように促す。

ウ Student ⇔ Student （1回目）

ペア同士の対話に挑戦させる。この際、使わせたい表現（Target sentence）を板書しない。（時間や、やりとりの回数など目標を持たせておくとよい）

エ Sharing （1回目）

中間評価をとり、困った点、参考になる友の姿等を共有し、後半に見通しを持たせる。

オ Student ⇔ Student （2回目）

ペア同士の対話に再度挑戦させる。

カ Sharing （2回目）

対話からわかった友の姿を全体で共有する。

（3）公開授業に向けての Small Talk の指導とその成果

本時にかかる部分では Small Talk を 10 回ほど実施してきた。どのような流れで取り組んだのか、また本時の生徒の姿がどの指導過程で身につけられたものかをあげていく。

回	【Small Talk のテーマ】,「Today's Point」, → 当時の授業の様子, □ 本時の生徒の姿
①	【Food】「少しでも長く会話を続ける」 →ほとんどの生徒が１分間という時間の中で空白の時間を作ってしまった。会話を続けるために何ができるかを確認した。反応や質問するなど多く出てきたので次時の課題とする。
②	【Food】「会話を続ける」「自分から質問する」「反応をする」 →反応することと質問することを、例を挙げ練習した。生徒間で Why?が多く使われ始める。
③	【Animal】「自分から質問する」「反応をする」「理由を加える」 →質問に対して And you?や How about you?と聞き返されることがわかり、Why?にも理由を述べられるように練習した。Because を導入したが、使用目標には入れなかった。

④	【Sports】「理由を伝える」「色々な動詞を使う」「アイコンタクトやジェスチャーをする」 →like や play の使用が多くなり、話を深めるために多くの動詞を使うことを目指した。反応の仕方についても質問があり、確認や賛同、問い返しの方法を Teacher's Talk から考えた。

※本時の生徒の姿　　（ 外国語 － ５ － 会話より ）

N 生は、What, Where などの疑問詞を使い、スポーツ名を入れ替えて質問を続けることができた。また、P 生も食べ物の名前を入れ換えどこで食べるのかを尋ねていた。このやりとりから、相手の言葉を繰り返して確認したり、"Nice." "Me too." などの相づちを使って応答したりと会話を続けるために必要な技能を身につけてきている。また、"Anything else?" などの問い返しを使って話題を広げ、更に Why, Where, When などの既習表現を用いて相手の応答に関連した質問をしたり、力もついてきている。N 生は、野球について"Is it fun?"と相手の気持ちを尋ねる質問もできていた。

⑤	【Sports】「色々な動詞を使う」「アイコンタクトやジェスチャーを入れる」 →そのテーマで使えそうな動詞を先にあげ、それらを意識的に使うよう促した。また伝わりにくい、あるいは知らない言葉について「何て言うの？」と尋ね合う機会が増えたため、知っている言葉で伝えるよう努めることを確認した。言葉で伝わらない場合はジェスチャーでそのものの動きを示すことも有効だと確認した。

※本時の生徒の姿

好きなタレントについての話し合いの中で、声優（キャラクターボイス）やお笑い（コメディアンタレント）などの表現に話題が及んでいる。未習の単語について知っている言葉をつなぎ合わせて伝える Small Talk の基本姿勢がこの思考段階で身についていると感じる。

（ 食べ物をテーマに先生にインタビューした P 生 ）

P 生は正確な英文ではないが、一番好きなケーキについて "What cake do you like? えー、No.1"と何とか質問しようとする姿があった。最初は準備していた英文を思い出しながら話していたが、後半では話題となっていることに意識が向き、聞いてみたいことを知っている単語を使って英語で伝えようとしていた。

⑥	【I like…】「自分のコメントに一言加える」「答えに対して詳しく聞く」 →インタビュー形式な会話になりがちになっていたので、自分の答えに一言加えることを確認した。どんなことなのかイメージしづらいという意見が多く上がったため、好きなものを語ることが情報を発信する上で一言加えやすいと考え、上記のテーマを設定した。

※本時の生徒の姿

F 生、H 生は質問に終始せず、"Oh, I like Japan."と自分の考えも伝え、お互いの情報共有ができていた。F 生が先生からの問い返しに対し、自分の好きな国を答えるだけでなく、"It's safe."と理由を添えている。好きなものについて一言加える練習が活きていると感じた。後半の会話では F 生、H 生とともにうなずきながら相手の話を聞く姿勢が多くあり、良い聞き手を意識したものになっていた。

⑦	【I like…】「自分から質問する（深める、話題を変える）」「良い聞き手になる」

※本時の生徒の姿

L 生は先生からの問いかけ "What sport do you like?"に対し、"I like volleyball." と答え、"What sport do you watch?" と質問を返した。また、自分が好きなバレーボールを先生も好きだということが分かり、とっさに好きな選手を尋ねた。相手の返答から話題を絞って深められるような質問している。さらに、知らないバレーボール選手の名前に "I don't know."と自分の意見を伝えている。

（ 苦手な食べ物をテーマに先生にインタビューした Q 生 ）

Q 生は「苦手な食べ物はあるか」だけでなく、「苦手な寿司のネタはあるか」という質問も考えていた。「苦手な食べ物はない」と返答したことに対し、それまでにあがった寿司の話題に関連した質問をして話を膨らませることができた。

⑧	【After School】「具体的なものをきく」「良い聞き手になる」 →話を深める方法として具体や詳細を尋ねるということがあがり、when, where, how many など疑問詞を使って聞けることを教科書で扱った。
⑨	【After School】「わかったことを第三者に伝える」 →先にテーマについて会話をし、後半は三人称単数現在形を見通して、三単現 s は使わずに He や She を使って発表する練習をした。生徒の中で be 動詞との混同が見られた。
⑩	【Holiday】「わかったことを第三者に伝える」 →様々な動詞が使えそうなテーマとして掲げ、前時と同じように会話中で分かったことを三単現 s は使わずに He や She を使って発表する練習をした。
本時	Today's Goal：松中の先生のことを、英語を使ってもっと知ろう！

3. リモート会議システムを利用した交流学習　～自己紹介＆友だち紹介を発表～（コロナ対応）

（1）授業の実際

交流　学級：阿智村立阿智第一小学校５年生（３４人）と第二小学校５年生（８人）

Unit（単元）：Unit 4　「She can bake bread well.」８時間目

システム等：阿智村で採用のテレビ会議システム Teams を用いてのリモート学習（第一小がホストとして第二小を招待する形）

（2）授業の実際

・発表は，２人ずつのペアになり，一人が相手の紹介を行い，それについて紹介された側が何らかのリアクションをするといったもの。

・子どもたちは第一小と交互に発表をしていったが，しっかりと練習を重ねてきたこともあり，のびのびと発表をすることができていた。

・発表はスムーズに進み，お互いに１時間で全員の発表を聞くことができた。

（3）生活記録より

・第一小学校の友達の名前の知らない人の名前を何人か覚えることができたのでよかったです。まだ名前を覚えることができてない人の名前を覚えたいです。

・自分が発表するときは、きんちょうしたけど、第一小の人となかよくなれてうれしかったです。

・第一小の５年生と第二小の５年生で、英語の発表会をしました。とてもきんちょうしました。でも、上手に発表できました。第二小と同じ名前の人がいたのでびっくりしました。

・最初に５年生で次に第一小学校でその次に５年生で次に第一小学校次に５年生一人、四人という順番でやりました。最後に、ぼくの番が来て R ちゃんが発表して次にぼくが S 君を紹介しました。上手にできたのでよかったです。次は、阿智第三小学校や他の小学校と英語で話したいです。楽しかったです。

（4）まとめ

第二小の８人に対し，第一小は 34 人と，４倍以上の人数差があり，実際に交流しようとすると数の上で圧倒されてしまう懸念があるが，リモートで行うと人数の差こそ感じるものの，発表そのものに威圧されるようなことがないのがリモートの良いところだと感じた。

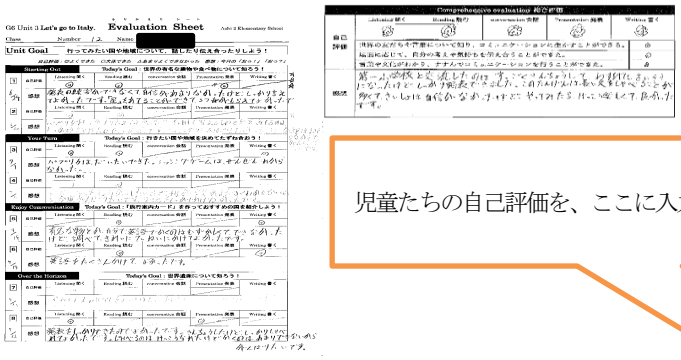
4. 小学校外国語評価について

（1）通知票評価項目について

本委員会では、郡内各小学校の外国語評価をどのように行っているのかを調査しまとめた。調査した全ての学校において、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の 3 つの観点で評価を行っていた。評価内容については、概ねどの小学校も、①5 年生、6 年生の 2 学年を通して共通した評価項目を作成する②5 年生、6 年生学年ごとに違った評価項目を作成している③4 技能 5 領域ごとに分けて評価している、のいずれかで行っていることが分かった。詳しくは、グループウェアにて発信している内容を確認していただきたい。

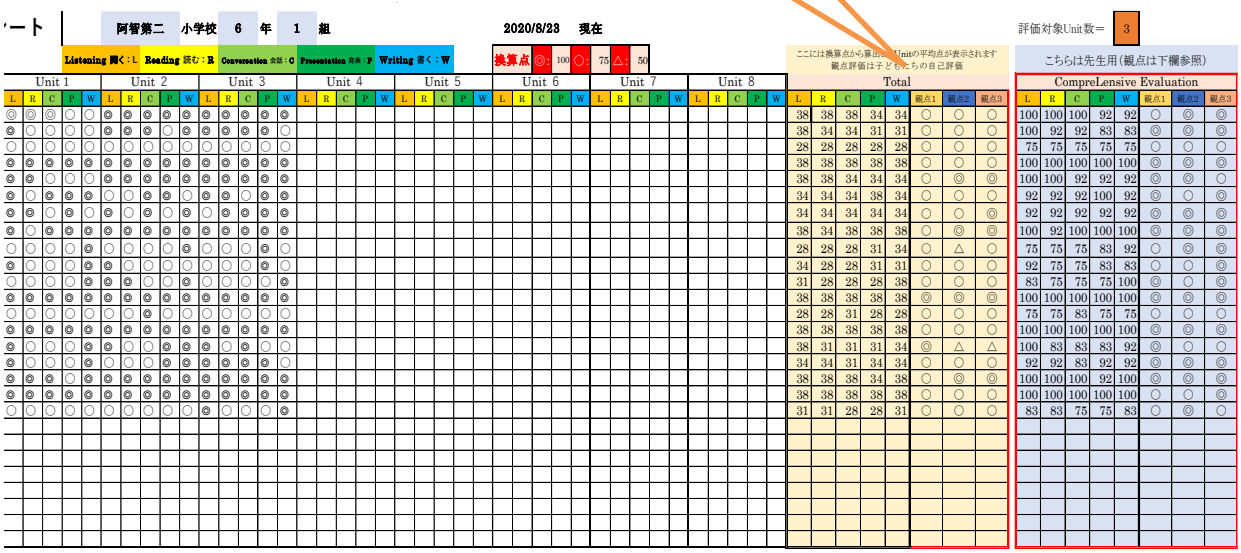
（2）評価の実際　～阿智第二小・評価シート方式の例～

Excel「外国語評価シート」上に，児童の自己評価を入力していくと，換算点から算出した Unit の平均点が表示され，これに教師の評価を加えて，観点ごとの評価を行う方法。換算点は変更できるので，それぞれの学校に応じて，評価のウェートを変えることが可能となる。児童シート（Evaluation Card に児童が記録した評価）をそのまま記録した部分と、教師による換算点と総合評価（Comprehensive Evaluation）に分かれ、総合評価の観点別評定が、そのまま通知票の評価として記載することになる。学期ごとにシートを変えれば、学期別の通知票評価として残していくことができる。ただ、教師による観点別評価については、数値による換算が難しく、どうしても全体を通しての教師の判定が必要となる。（これについては現在数値化できないか検討中）



詳しくは、グループウェアにて発信している内容を確認していただきたい。

児童たちの自己評価を、ここに入力。



1 初期入力・・・学校名・学年・児童名を入力してください。
2 Data入力①・・・Evaluation Cardをもとに，Unitごとの児童の自己評価を入力して下さい。
3 Data入力②・・・先生から見たその子の評価を入力する。
4 総合評価・・・Data①②をもとに，観点別評定を入力する。
5 換算点は変更できます。使いやすいように変更してお使いください。

観点１：知識・技能
世界の人々や言語について基本的な知識をもち、コミュニケーションに生かすことができる。
観点2：思考・判断・表現
コミュニケーションの場面に応じて、基本的な表現を使って自分の考えや気持ちを伝え合うことができる。
観点3：主体的に学習に取り組む態度
言語や文化に対する理解を深め、すすんでコミュニケーションを行おうとしている。

Ⅳ 研究で明らかになったこと（見えてきたこと）

１ 学び続ける個が育つための授業づくりについて

・Small Talk 等を利用し十分な練習活動を確保することで既習事項が定着し、主体的に学習に向かおうとする姿勢ができる。

・学習内容や学習過程を振り返る活動を仕組むことによって、自分自身の考えを修正し深めたり自信をつけたりする機会となる。また、友と関わりながら振り返ることで、考えを広げたり深めたりすることができる。

２ Small Talk について

・会話の内容、方法により、本時の内容を示唆したり、本時で扱う新出表現のモデルになったり、前時の内容を思い出したり等さまざまに活用できる。

・Small Talk の目的を明確にすることにより、対話の基礎や方法を段階的に身につけることができる。また、帯で位置づけ積み重ねることにより、対話を続けたり広げたりするための「相づち」や「受け答え」の技能が習得でき、深まりのある対話活動につなげることができる。

・Small Talk で会話を円滑に進めるために必要な指導として、次の４点が挙げられる。

（ア）お互いの言葉が伝わっていることを確認できるよう、必要に応じて相手の応答を繰り返すこと。

（イ）自分の気持ちを伝えられるよう、会話の中でよく使えそうな相づちの例を示すこと。

（ウ）会話が続かなくて困ったときに話題を広げられるよう、問い返しを示していくこと。

（エ）関連した質問を考えさせる際に、使えそうな名詞や形容詞を示し、１単語入れ替えながら質問を考えていくこと。

３ リモートシステムを利用した学習について

・遠隔での発表は、人数や施設等の学校間格差を意識せず話すことができる。

・遠隔で行う活動においては、お互いが知らない情報に対するニーズが生まれ、情報をやりとりする活動には大変有効である。

４ 小学校評価について

・どの学校でも、３つの観点、５つの評価項目をどのように児童生徒、保護者に伝えていくかを加味しながら、各学校の状況に応じた評価内容を作成している。

Ⅴ 本年度の研究の結果から次年度にさらに研究する課題は何か

・中学校の評価について

来年度、中学校から新学習指導要領が実施され、評価項目と評価方法が変わる。定期テストも出題方法を変えていかなければならない。どのような評価をしていくべきかを研究していきたい。

・ＩＣＴの利用

児童生徒１人１台ＰＣタブレットが配布され始めた。また今年度のようなコロナ禍において、どのように、有効かつ効率的に活用できるか、活用法や指導法を引き続き、研究していきたい。